

## 解説

阿部公彦（英文学者）

ついに西村賢太氏と会ってしまった。

今から思うとその発端は不穏なものであった。ある人から届いたメールには、「ちょっと詳細を述べることはできませんので、何も訊かずにイエスカノーで答えなさい……」とまるで秘密結社の暗殺指令みたいな文面が記されていた。なぜこのような暗号解読めいたやり取りをしなければならなかったかについては、差し障りもあるのここでは書くことはできないのだが、ともかく私の方もこのノワールな気分を壊さないよう慎重かつ密やかな対応をし、さらにいくらかの紆余曲折をへた後、いったんは「ナシ」となりそうだった企画があれよあれよという間に準備が進んで、気がつく私は「西村賢太が東京大学にやってきて授業をするよ」というような会の進行役をする事になった。

英文学を研究し、しかも詩が専門分野である私にとって、西村賢太という作家は必ずしも「守備範囲」とは言えない。にもかかわらず、もう十年以上前、『どうで死ぬ身の一踊り』（講談社）で氏の作品に接して以来、私はその著作を買い集めては読みふけり、他人にも「読め」と勧め、授業でも取り上げ（さすがに英詩の授業ではないが）、喜んで書評も引き受けてきた。

それほど傾倒するなら、いっそ「西村賢太論」でも書けばいいものだが、もちろん、「論」などというものを一切受け付けないのが氏の作品の強みでもある。書評や解説は書いても、もったいぶった議論など振りかざしたら歯が立たない。立派な理論や用語、あざとい分析や社会学風の軽やかなマッピングなどでんで役に立たないのである。そういう意味では私にとって西村氏は、作家の中でも特異な存在であった。

その本人といよいよ会うのである。

イベントの前には主催者との打ち合わせもあり、「これはあくまで西村さんによる授業がメインなので、進行役はよけいな介入はしなくてよろしい」ということが確認された。私は無口な人間なので、何もなくてよろしいということであればいくらでも何もしないでいられる。氏が多弁な人とも思えなかったが、テレビ出演も多いし、

以前にもNHKの企画で小学生を相手に見事な授業をしている。担当編集者の方も、「いやあ、西村さんは話がうまいからせんせん大丈夫ですよ」とのことだった。

作家に会うというのは、ふだんとは違う緊張感を伴うものである。西村賢太に限ったことではないが、著述家の場合、私たちは活字の上でその人をすでに知っている。それだけに本人とお目にかかって、そこに活字上でのイメージとの齟齬が生じたらどうしようと心配になる。とりわけ、好んで読んできた書き手の場合はなおさらだ。ちよつと会って話したくらいではとてもわからないほどに文章というものはその人の生々しい部分を伝えるはずなのである。ましてや私小説作家となればなおさらだ。もし西村賢太という作家が、私の読み方をまったく裏切つて、私が勝手にこしらえた思いこみの枠の中から蝶蝶のようにひらひらと飛び出してしまったらどうしよう……。

西村氏の風貌はもちろん知っている。ラグビー・フットボール勢の最前列で、敵とにらみ合いながらスクラムを組みそうな、戦う目を持った人に写真では見えない。テレビ画面で微笑んではいても、それはラグビーの試合の合間にひとときの休息を得ているだけだろう。いつしか私の中では北町貫多の像に、ラグビー部フットボール最前列の風味を加えた西村賢太像ができあがっていたのである。こらえ性がないがこだわりも強

くて、一面とても禁欲的。コミカルだけど怖いほどの透徹した賢さをたたえ、哀しさとかやさしさを知っている一方、短気で破壊的でもあるあの主人公。

すでに西村賢太のことをこんなに知っているのに、いまさら会ってどうしようというのだろうか。

そして、いよいよ当日である。

思いがけず西村氏は会場に早めに到着するという。私が控え室から出ていくと、大学の正門前にはすでに編集者のおふたりが立って、本郷通りの駒込方面に遠い目をやっていた。

「なんと携帯はお持ちなんですよ！」と女性の編集者。

すると、向こうからやってくるタクシーの後部座席にすばやく氏の姿を見つけた男性編集者が「あ、いらした」と声をあげる。

ナマの西村賢太は私の思いこみをいささかも裏切らなかつた。タクシーから降りたつて丁寧にお辞儀をする礼儀正しさには、何の意外性もなかつた。

まずは控え室で一息。関係者とひととおり挨拶をすませると、氏が喫煙のジェスチャーをされる。学内ではすっかり数が少なくなりましたり着くのいささかの困難のあ

る、ビニールハウスみたいな喫煙所の一つに私が西村氏をご案内することになった。その道すがら、「今日、ぜんぜん準備してないんすよ。カネがいいっていうから来ただけでね」とのこと、さすがに「ありやうや」という感がないでもなかったが、考えてみれば「そうこなくっちゃ」という展開ではある。何と言ってもあの西村賢太なのだから。

しかし、何となく雑談しているうちに、一般の人から見ればきわめてどうでもいいことながら、私にとっては重大なことが一つ判明してしまったのである。

何と西村賢太氏は私の一つ年下だったのである。

あまり表には出さないが、私は昔から無駄に学年至上主義的なところがある。一年でも学年が上なら「先輩」だ。もちろん敬語である。態度もどこなくへりくだって、上目遣いになる。西村氏が自分とだいたい同世代であることはむしろ知っていたが、あの人生経験豊かな主人公にラグビー部フォワード風の闘う目がブレンドされて、いつの間にか「西村氏は三、四年先輩」というイメージが私の頭には擦りこまれていた。ところがたとえ一年とはいえ、西村氏は私の「先輩」なのだという。「先輩」となれば、学年至上主義の私としては扱いが変わらざるをえない。たとえば名前を読むに

ても、「おう、賢太っ」とまではいかなくとも「西村君」とか「西村ちゃん」とか、あるいは「西村っち」というふうには、先輩アレンジが必要になるのである。

しかし、西村賢太氏に対して、たとえ心の中であつたとして私が「賢太っち」などと呼びかけている図を、たとえばみなさんは想像できるだろうか？ 自分で言うのも何だが、がっしりと体格のいい氏の横に立つと、私は見るからに顔色が悪くてやせ細った、たよりのないごほう人間のように見える。万が一、氏の小説中にまちがえて迷い込んだりしたら、すぐさま「鼻づまり野郎」などと罵倒され追い出されるにちがいない。むこうから「阿部ちゃん」くらい言われることはあるかもしれないが、こちらから「賢太っち」とか「賢太っぴい」はありえない。

私はこんなつまらない事実で（しかし、私にとってはなかなか重要なのであるが）、すっかり混乱してしまった。しかも、いつの間にか私の心の中では「西村賢太氏」後輩意識がむくむくと黒雲のように増殖して、このままではほんとうに「西村びよん」などと氏に呼びかけ取り返しのない事態を引き起こしてしまいそうな心配が漂ってきたのである。

このあと、氏の授業開始までの一時間、それから実際の授業の九〇分間、私はずっ

とこの混乱と格闘していた。おそらくネット上に公開された映像にもそれはあらわれているだろう。にこやかに話を合わせて下さりながら、ときおり氏がこっそりと不敵な目で「どうだ。オレのことほんとうは〈賢太っぴ〉」って呼びてえんだろう？ 呼べるものなら呼んでみろ。ただじゃすまねえからな、スカびようたん！」と威嚇してくるような妄想が湧いてくる。なんと濃密な時間だったことか。

さて。あれほどの濃密なひとときをとにした氏のエッセイ集である。もちろん小説とは書き手のスタンスも違うのだが、読み進めるうちにたちまち氏の文章に取りこまれてしまうのは同じ。本書にまとめられた連載にはエッセイストとしての西村氏の才能が遺憾なく発揮されている。各回ごとにならずおいしいネタが仕込まれ、痛快な一節があり、笑いや哀しさや「うわっ」とのけぞるような衝撃的なブライベート事情（これは読んでのお楽しみ）も。これが西村賢太初体験という人もまちがいに小説作品へと手を伸ばしたくなることだろう。

しかし、私にとつての本書の最大の魅力は、絶妙な話芸の間からときおりのぞく西村氏の小説執筆に向けた執念のようなものである。執筆の「工程」を説明するときの

みならず、自身の体調や体質を描くとき、文壇や編集者や読者に対して不満や怒りをあらわすとき、誰に向かうものでもない深い怨念をはき出すときにも、必ずそれが「書く西村」とつながっている。エッセイというものは小説家のいわば「ナマ」の部分をさらすのが前提のジャンルでもあるが、その「ナマ」がうろろ一人歩きするのではなく、つねに「書く西村」を浮かび上がらせる。切れば血が出るような文章という言い方をよくするが、これだけ軽妙にこちらを楽しませてくれるサービスマン満点の書きぶりなのに、「ここにまちがいに西村賢太という作家がいる！」とばかりに、痛くてこちらに痣が残りそうな触感とともに伝えてくるその揺るぎなさは感動的なのである。

二〇一七年二月